×　　×

フィリポはイエスが提示する神を「示してください」と言う。それは、実証してくださいということである。実証してくださいとは、証明して見せてください。又は検証出来るものとして納得させてください、ということである。彼は「そうすればわたしたちは満足します」と言った。イエスは「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか」と言われた。

フィリポはイエスを愛し信頼している。そこでの師弟関係には壁はない。しかしイエスや神についての存在理解には構造的な差異がある。端的に言えば、イエスが語る神の世界がイエスの深さに於いて理解し悟れないのだ。だから「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしについて分からないのか」とイエスは言われる。

×　　×

「主よ、私たちに父（神）を見せてください。そうすれば私たちは満足出来ます」というフィリポの語りを、イエスは痛ましい思いで受け取られたにちがいない。一体、イエスとフィリポとの壁は何なのだろうか。ここのところを明確にすることは、イエスとフィリポとの問題にとどまらず、私たちの神理解、人間理解、存在理解の構造そのものに関わる問題に関係してくるのである。

そこで、先ずフィリポの言葉に注目しよう。彼は「満足します」と言ったが、彼の何が、何について「満足」するというのだろうか。

結論を先に言うと、フィリポの存在理解の構造の基底にあるものは「自我」であり、その自我で神を確認することで彼は、自分の自我を満足させ安心させようとした。だから彼は「神を示してください」とイエスに願ったのである。自我とは自分の我ということであり、その我を自分の一切の基盤に据えることが自我の働きである。また、その自我の尺度で全てを判断し了解し確認することで、自分に満足と安心とを得ようとする在り方が自我絶対主義である。その意味でフィリポの存在の構造の基底は自我なので、ある。一方イエスの存在構造の基盤は自我を越えた神の大いなる命のたぎりにある。イエスは「神の支配」に自分を置き、その命のたぎりを行じ生きている。したがって、自我から見、聞き考え、語り、欲するフィリポと、自我を越えた大いなる命のたぎり、即ち「父なる神の支配」から発語行動するイエスとの存在構造の基盤との差異が生じるのは当然の事である。次の場合にも同じ事態が起こっている。

一行はカファルナムに来た。家に着いてからイエスは弟子たちに、「途中でなにを議論していたのか」とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、す

べての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方（神）を受け入れるのである。」

―マルコによる福音書九章三三節以下―

誰がいちばん偉いのか、と議論する弟子たち。イエスはそのことの善や悪を論じられない。また、弟子たちの倫理的な謙虚さの無さを責められない。イエスは彼らの存在の構造そのものを問うておられるのである。神のご支配を説くイエスに従う彼らが、自分の存在の構造の根底に自我を据え、そこから自分を立てることを競い合うような言動、つまり「われわれの中でだれがいちばん偉いのか」と議論することに、弟子たちが未だに、自我の向こう側に躍動する命に開眼していない姿を見て、深い危惧を持たれたのである。だから「イエスは座り十二人を呼び寄せ」、近くにいた幼子を抱き上げ、人が自分で自我を立て自己への配慮をする以前に、すでに神の絶対的な支えがどの人にも及んでいることに目覚めなさい。このような無力な幼子もそのままで生かされているではありませんか。と提示された。次の場合も同じである。

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、（復活の）イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが「わたしたちは主（イエス）を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、またこの手をその（槍で突き刺された）わき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者でなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである。」

—ヨハネによる福音書二十章二四節以下—

イエスの復活に関わるトマスは、自我を自分の存在の構造の根底に据え、そこから復活のイエスを判断し理解しようとした。彼の自我は自分の手や目で触り見て、確認しないかぎり、わたしはイエスの復活を信じないと言う。これこそ自我からの出発であり、自我絶対化である。そのトマスの前に復活のイエスが顕現して、「見ないで信じる者になれ、見ないで信ずる者は幸いだ」

と言われた。イエスは妄信せよと言われたのではない。「信じなさい」とは不信を捨てなさい、ということではなく、「信ずる」「信じない」を越えることが、信ずるということである。信ずるか、信じないかなどというところでうろうろしていては、人は永遠に迷いっぱなしである。信ずるとか、信じないとかいう世界は、所詮は自我が生み出した迷いである。

自我を自分の存在構造の根底に据えて、そこから真理を説き、熱心に信仰の救いを語っても、又、それがどれほどの深い哲理を含んでいたとしても、それは所詮、自我の産物のひとつにしかすぎない。このような熱烈信者が、政治や宗教その他の世界に多々見ることがある。

×　　×

自我の世界を越えるとは、何かを信ずることによって自分を立てようとする自我を越えることである。また、何かを信じないことで自分を立てようとする自我を越えることでもある。「うらみ悲しみ途中の雲よ、上の空にはなにも無し」という法語がある。それは、恨みや悲しみは自我の産物であり、自我はそこが限界だと思い込んでいる。しかし、事実はそれらは途中の雲であり、それを突き抜けると無限に広がる命のたぎりの世界があるのだというのだ。命のたぎりの世界をイエスは「天国」つまり「神の支配の世界」だと言われた。そしてその命のたぎりは、どの人の足元にも及んでいると言われる。その命の事実に覚めよ、と言われる。

神は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。

―マタイによる福音書五章四五節―

神の命のたぎりが人間の一切の観念の働き、即ち一切の思慮分別に先立ち、ありのままに命しているのである。その神の支配に立って人間存在を見るとき、頭の毛一本たりとも、神の許しなしには落ちないと言える。事実イエスの言動はそこから発しているのだ。（マタイによる福音書十章二六節以下）

× ×

イエスと弟子との間にあった壁、それは自我レベルでの善と悪、完全と不完全ということではない。自分の存在構造の根底を自我に留めるか、それとも自我を越えた神の大いなる命のたぎり即ち神の支配に覚め、そこに自分を立たしめるか、という壁であった。自我を越えるとは、自分の一切の観念が作りだす以前の事実に覚めることである。それが先に述べて来た「直接経験」である。その意味で、直接経験に於いて確認する神の支配の世界は言語を越えている。にもかかわらずその世界を自我言語で叙事、つまり出来事を客観的に語るように述べ、また理解するなら、それは自我レベルの情報にしかすぎなくなる。

三　創造に於ける自然

イエスは言われた。

神の国(神の支配)は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。

―マルコによる福音書四章二六節以下―

どの人も、自分の願いによって生まれ死ぬのではない。人の生死は、その人の思い以前の出来事である。人が自分の人生について何かを論じ、自分の生きる態度を選択決定出来るのは、人が存在させられているという大決定に基づき成り立つのである。その意味で人が自分の人生をどの

ように理解し、どのような生き方を選択するかということは、信仰、不信仰も含めて第二の私事にしかすぎない。にもかかわらず、人は人生に於ける第二の私事を第一の事と思い込み、自分の存在を自分で支えねばと思い悩む。しかし、どの人も最後に自分の存在の支え手が自分ではないという大決定に直面する。例えば、どの人も必ず死ぬ。死はその者の幸、不幸の思案の外、つまり私事を越えた大いなる命の大決定である。その意味で死とは、自分の存在の根源的な命、即ち、第一の事としての大いなる命の有り難き現れなのである。だが、自分の存在の支え手が自分だと思い込んでいる者にとっては、私事の不幸、私の存在の悲惨と敗北だと思う。しかし、人間存在の本当の悲惨は、人間存在に於ける生死が、大いなる命の有り難き大決定のもとに成り立っている事実に覚づかないことである。

×　　×

イエスは人生に於ける大事として、私事の思案を越えた存在の根底に神の大決定が第一の出来事として命していることを示された。一般的に人は「無神論」か「有神論」かと議論する。また、「キリスト教」か「仏教」かとその立場の是非を論議する。さらに「科学」か「宗教」かとその是非を語る。そして「あの世」があるか「この世」だけなのかと思いめぐらす。だが、イエスに於いてはそれらの事柄はすべて「第二の私事」であって、第一の事ではない。イエスは事柄の窮極の支点、または根源として、それをそれたらしめている命のたぎり、即ち神の支配そのものを

第一の出来事として提示された。イエスに於いては、有神論も無神論もキリスト教も仏教もその他、おおよそ人間が認識し行動する一切が人間の分別的な自我からのものであるかぎり、それがどれほど理に叶(かな)っても、それは「第一の出来事」に基づく「第二の私事」であるとされた。先の「成長する種のたとえ」もその一つである。即ち、大地に蒔かれた種が、人の側の一切の思いと行いとは別に、ひとりでに芽を出し茎が出来、穂が生じて実がなり収穫出来るようになる第一の事実を語っている。それは人間の側の善悪、信、不信、分別による計(はか)らい等とは別に、または先立って神の命のたぎりとしての根源的な大決定の現実を提示されたのである。この第一の出来事のところでは、第二の私事が生み出す「思い悩み」は無いのである。その意味では人間存在を含めた存在の根底のその場は命のたぎりとしての「さいわい」または「愛」が満ち満ちているのである。イエスはこのような命の事実を、この世の日常の私事のその向こう側にハッキリと見ておられ、そこに立ち、そこから、それを提示された。イエスの語りはそのような性質の言葉であり、その世界を人々に覚(さ)づかせる機能をもつ言葉なのである。次の言葉も、そのようなイエスの言葉の一つである。

だから言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また、自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉にも納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばす事ができようか。なぜ衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つか注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ。だから、「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と言って、思い悩むな。あなた方の天の父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国(神の支配)と神の義(神の確かな命のたぎり)を求めなさい(目覚めなさい)。

—マタイによる福音書六章二五節以下—

×　　×

神の支配のもとにどの人もいるということは、人がなにもしなくてもよい、ということではない。無為にいてすべて必要が満たされるということをイエスは語られたのでなく、すべての人の生の根底に無条件に備わっている事実をそのままに人が覚づくことから、私事の本来の在り方が始まることを提示されたのである。その意味でイエスの言葉は神についての叙述、又は神に関す

る情報や説明のことばではなく、私事を越えてわたしをわたしたらしめている神の支配の現実、命のたぎりその事実の凝縮された根源言語なのである。このようなイエスの言葉は人間の人格の根底に響き、人格全体即ち、肉体も思いも考えも、理解も感情も、欲望も精神も、意思も意図も人間の本来に向かって燃え立たせるのである。この情況を適切に語っているのが、例えばエマオへの途上でイエスに出会った二人の物語である。次のように語られている。

二人の弟子がエルサレムから十一キロ離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事(注―エルサレムに於けるイエスの十字架の死と復活の事件―)について話し合っていた。話し合い論じ合っていると(復活された)イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。……一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるために家に入られた。一緒に食事の席についていたとき、イエスはパンをとり、賛美の祈りを唱えパンを裂いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は「道で話しておられるとき、また聖書を解きあかしてくださったとき、わたしたちの心は燃えたではないか。

―ルカによる福音章二四章一三節以下―

×　×

イエスの言葉、または聖書の言葉は第一の事としての神の支配から発せられた根源言語である。それを宗教言語と一般化していうなら、そのような宗教言語を一般言語としての指示言語として受け止めてはならない。例えば、イエスの言葉を単なる命令や指示の言葉として受けるなら、それは忽ちこの世を清く正しく生きるための只の道徳や倫理の規範を命じる有り難いお説教となる。さらに、イエスの言葉や聖書の言葉を、誰が何時、何処で何を語り行ったかという歴史的事実の客観的な情報として受け取り、それをそのままに承認し、その情報を信じ、模範とすることをもっとも正しい聖書的信仰とするなら、それは安っぽいただの教条主義、律法主義、形式主義、合理主義に成り下がってしまう。またイエスや聖書の語りと出来事を、単なる人間の内面の心情や知性の語りとして受け止めるなら、それは心理分析の対象となり、また人間心情の文学的な自己表現と共感され、さらに哲学的な理性に於ける表現と理解されることになる。しかし、イエスの言葉、聖書の言葉は命令の言葉ではない。単なる客観的な情報伝達の言葉でもない。さらに心理分析の可能な言葉でも、文学的な自己の心情表現でもない。そして、人間理性の限界内の思考の知的な理解の言葉でもない。では、イエスの言葉、聖書の言葉即ち宗教の言葉とはどういう言葉なのだろうか。

×　　×

先に、イエスの言葉は根源言語だと言ったが、それは神の支配、命のたぎりから発語された言葉ということである。しかし、言葉となって現成した限りに於いては、それはこの世の私事に属する。第一の事としての命のたぎり、神の支配そのこと自体は、言葉を越えているのであって、そこではどの様な形も響きもない。言葉となった瞬間それは、この世の私事に属する第二の事となる。その意味からいうとイエスの言葉は根源を神にもつ「人の言葉」つまり「神・人言語」だと言える。だからイエスは「わたしが語ることは、父(神)がわたしに命じられたままに語っているのである。」(ヨハネによる福音書十二章四九節以下)と言われた。これは、イエスに神が憑依して神が語るということではない。憑依とは、憑依された者の自覚は奪われロボット化されるからである。イエスは「わたしは知っていることを語り、見たことを証ししている」(ヨハネによる福音書三章十一節)と言われるとおりイエスの語りは神の支配の世界を自覚的に私事の世界で語っているのである。とすると、イエスの言葉は、神の世界の事実、つまり命のたぎりとしての第一の事実の自覚的な言葉、つまり「神・人言語」である。では、その言葉が秘めている内容とは何なのか。イエスが提示されたそれを私は「創造に於ける自然」と表現している。

×　　×

イエスは言われた。

神の国(神の支配)は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。

―マルコによる福音書四章二六節以下―

私たちはさまざまな考えや思いを持ち、それに相応しい生き方をしている。まさにその様子は千種万様である。それぞれの考え方や生き方はその人の責任に於いて自由であって、他人からとやかく言われる事ではない。例えば人がどの宗教を選択するかは、その人の責任に於いて自由である。さらに、選んだその宗教をどのように解釈し、どのように理解して受け取るかということも、その人の責任に於いて自由であり、その解釈と理解の仕方が正しいとか誤りとかということは一概に決定できない。その意味で一つの絶対的な価値基準を造りその基準に照らしてことの正否善悪を決定することは、一般的に人間の自己実現を促進する働きとなる事もあるが、一方に於いて人間を破壊する勢力となることもある。このような正統と異端ということは、この世のいろいろな分野や場面に登場して、対立を生み、争いとなって凄惨な状況を生み出す事がある。例えば「キリスト教」などはその代表的なもので、その歴史は古来より正統と異端の激しい拮抗の中

で発展してきたといえるが、この紙面では「正統と異端」について語ることが目的ではなく、「正統と異端」という主張の立場は、どこまでも人間が生み出した価値観を反映した物心両面の社会的な様式としての文化現象にすぎないのだということが確認できれば十分である。

×　　×

その意味でイエスは文化を語ったのではない。勿論、倫理や道徳を語ったのでもない。加えて言うなら「宗教」をも語ったのでない。なぜなら、倫理や道徳、それに「宗教」も人間が生み出す文化現象にしかすぎない。

イエスが提示したことは人間の自己が成り立つ根底に何があるのかということ、そしてそこに有る事実を「神の支配」と言われた。神の支配とは人間の側の考えや思い、判断や推理、努力や生産とは全く関係なく、人が人として生きているその根底に始めから既に躍動している命のたぎりその事である。その命の事実をイエスは次のように明快に提示された。

父(神)は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。

―マタイによる福音書五章四五節―

悪人だから与えない、善人だから与える、と言う計らいは、人の側、即ち自我の世界の事であって、その自我の計らいに先立って既に、どの人のもとにも始めから有るのが神の支配である。その場こそが、「わたしは生きている」と人が言い得る根底としての神の創造に於ける命のたぎりである。そこでは善も悪もない。その命のたぎりの事実をイエスは「神は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせる」と語られた。また、「神の支配は、人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせる」と言われたのである

×　　×

私たちがどのような考えをもって生きていようと、例えば神が有ると信じていてもいなくても、または特定の宗教を選択してそれに生きていてもいなくても、その事とは全く関係なくそれ以前に始めから、どの人も神の内にあり、あったのだという事実こそ、人間にとって第一の現実なのである。このような第一の出来事は、その人が特定の神や仏や、宗教や主義や主張に生きた時から始まるのではない。第一の出来事は存在以前にある現実なのである。その意味では、人間の一切の思慮分別による出来事はすべて第一の現実に基づく第二の出来事にしかすぎない。この第二の出来事を「文化」と言ったのである。だから、イエスは第二の出来事を説いたのではない。第一の出来事が第一の出来事として人間一人一人のもとにあるという、人間存在にとって至極当然

のことを有りのままに自ら生きる現場で行じられたのである。

しかし、人は第一の現実に気づかず、第二の出来事としての自我の計らいが生み出す世界を、自分の存在にとって第一の出来事であるかのように思い込み、そこでの自我の計らいが自分を支える根底であるかのように大間違いをし、不安のうちに日夜苦労している。

×　　×

自分の存在にとって自分が主人ではなく、自分の主人は自分を越えた命のたぎりとしての神なのだ、ということに自分の存在の現場で気づくことが、人間が人間になるということである。人間がどれほど高度な知性と感性と意思の持ち主であったとしても、所詮は「土の塵の塊」であり、決してそれ自体自己完結した主体ではない。つまり人間の存在とその一切の営みは第一の神の命のたぎりに支えられての第二の出来事なのである。だからこそ、第一の神の命のたぎりという存在の根底を喪失したままの、第二の存在としての人間の存在は、土台を持たない空中に浮き上がった建物の如くに、不安をそれ自体に抱え込むことになる。土台が無い建物に文化という装飾をどれほど施しても、不安定から脱することはできない。その建物は空中に有る台無しであり、必ず虚無化され自滅する。

×　　×

どの人の生も神の命のたぎりを根底としている。その事実を抜きにして人間の営みは絶対に成

り立たないし、成り立ちようがないのである。そうある事実が「創造に於ける人間の自然」なのである。この場合「創造に於ける」とは簡単に言えば、人間の本来的な在り方、つまり神の命のたぎりを根底とした在り方ということであり、「人間の自然」とは神の命のたぎりを根底としたところから自ずと現成して来る生き方のことである。前者を第一の在り方というなら後者は第一から促(うなが)されて現成した第二の生き方である。結局第一の事実に基づく第二の人間の生き方が「創造に於ける人間の自然」ということである。そこで、第一と第二の在り方の関係を語るまえに「自然」について少し考えてみよう。

×　　×

自然というとき一般に言われることは西洋に於ける自然と東洋における自然とは異なるということである。どのように異なるかというと、西洋における自然とは、自己に対する対象的・客体的なもの、つまり自分が見て知るところの山川等として存在する対象物を自然と言うのに対して、東洋、とりわけ日本に於ける自然とは、対象的な物としてある花鳥山川の総称ではなく、「それらの自然のひとこまひとこまを自分の感性の動きの面に反映させて「自然さ」という情感に於いてみずからの心で感じとること」(木村敏氏)だといえよう。それは「あるがままの自然」を「おのずからある自然」とする情態性で共感すること、これを風に流されるままの自然つまり「風流」としての生き方と受けとったのが日本人の自然だと言えよう。これは、「あるがままの自然

を」そのままで「自ずから然り」として自らの世界観または人生観として肯定する生き方である。このような自ら然らしめる自然性を自ら然らしめる自覚の生き方と体得することが「悟り」というなら、宗教的な悟りということは、結局「自然」という次元へ人間が立ちもどることだと言える。しかし、このような自然の理解を人間の在り方とすることは、極めて日本的と思われる方もあろう。一面ではその通りだと言えるが、イエスの信仰の世界を福音書に於いて見るとき、イエスは人間の根源的、且つ究極的な在り方として「神の創造に於ける自然」を説き「自ずから然り」を自覚的に「自ら然り」として行じられた。その姿がイエスの全行動であったと思う。

×　　×

イエスは「神の支配」を提示したと言ったが、それは結局「創造に於ける自然」を提示したのだと言える。そして「創造に於ける自然」とは「神の命のたぎり」そのことであり、すべてに先立って、すべてのものをそのままに在らしめる大いなる命の事実に他ならない。その事実を、イエスは万感の思いを込めて「父さん」と呼んだのである。そこから「天の父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」と歓喜して語った。これはイエスの神賛美であり、深い深い感謝と安心との祈りである。

イエスが提示する福音の源はここにある。また「種の成長の語りでも、神の支配の現実を明快

に提示された。「人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、その人は知らない。土はひとりでに(自然に)実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実は熟すと、早速、鎌をいれる。収穫の時がきたからである。」

誰もがこの事実の前では沈黙させられ、自己の深みに於いて無条件に共感させられる。たとえその人がどのような主義主張に生きていても、どれほどの知識と技術を身につけても、また偉大な権力や富を持っていても、山を動かすほどの信仰や宗教的超能力を持っていてもそれらとは、全く関係なく、人の計らい以前に厳然として躍動する神の支配の現実、即ち「創造に於ける自然」として躍動する神の命のたぎりをイエスは提示され、自ら行じられたのである。

× ×

イエスは言われた。

また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、「偽りの誓いを立てるな。神に対して誓ったことは、必ず果たせ」と命じられている。しかし、わたしは言っておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。

……また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたがたは「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上のことは悪

い者から出るのである。

―マタイによる福音書五章三三節以下―

「一切誓うな」とイエスは言われる。これは命令ではない。どのような時にも誓うなと要求し命令しておられるのではない。人間にとって「誓い」という事は本来成り立ちえないのだ、というイエスの自覚から生じた言葉が「誓うな」という言葉である。

「一切誓ってはならない」というイエスの言葉を命令の言葉、または要求の言葉として受け取るなら、私たちの社会生活は成り立たない。なぜなら、私たちが生きている社会は合意(約束)に基づく法的社会だからである。その他「悪人に手向かってはならない」「人を裁くな」等のイエスの言葉に於いても同じである。

一般にイエスの言葉は命令や要求の言葉ではない。イエスの言葉を人間の生き方の規範を示す倫理や道徳の言葉として受け取るなら、人は現実の社会で生きて行くことを断念しなくてはならない。だから、多くの誠実な人達はイエスが示す言葉に憧憬をいだきながらも現実の自分の生き方とのギャップに悩んだ。ある人は、その規範を守っているような「つもり」や「ふり」をすることで対処しようとして、自分の偽善性に一層苦しんだ。また、ある人達はイエスの高潔な倫理性の要求の前に立って、それらの教えは人間の不完全性、または罪人性を知らせ、イエスの十字

架による人間救済のための贖いへ導く律法の言葉として受け取った。いずれにしても、イエスの言葉を命令や要求の言葉として受け取ることは、イエスの言葉の前に立つことに於いて十分ではないと思う。結論から言えば、イエスの言葉は「創造に於ける自然」の自覚から生じた言葉である。

×　　×

とにかく、「一切誓ってはならない」とはどのような自覚から出てきた言葉なのだろうか。一般に人が「誓う」ということは、自分自身に対して堅く決意する事だといえる。だから「誓った事」については、当人が全責任を持つことになる。だが、人間は、自分自身に対して自分自身が全責任を負う事が出来るほどの主体的な存在なのだろうか。自分の主人は自分自身であると言えるほどに、自分を支配出来る自分なのだろうか。「あなたは髪の毛一本すら白くも黒くもできない者」ではないか、とイエスはいわれる。どの人も、生まれる時が来て生まれ、死ぬときが来て死ぬ存在である。自分の生死すら自分で完全に自己決定出来ない者が人間である。その意味で人間は決して主体的存在ではない。にもかかわらず、あたかも自分の主人が自分であるかのように思い込んで、自分自身に対して堅く決意し「誓い」をなす。これは身の程知らずの傲慢である。自分がいかなる存在であるかを知らぬ人間の醜態である。

×　　×

イエスが「誓うな」と言われるとき、さらに深い自覚が秘められている。「誓うな」とは、先にも述べたとおり、誓い得ない自分の存在の自覚に基づくものなのであって、ただ誓うなということではない。それは次のイエスの提示が参考になる。

イエスはたとえを話された。ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは「どうしよう。作物をしまっておく場所がない。」と思い巡らしたが、やがて言った。「こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。一休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。しかし神は「愚かな者よ。今夜、お前の命はとりあげられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりである。

―ルカによる福音書一二章一六節以下―

金持ちが畑を豊作にさせた努力やその豊作物をどのようにしまっておこうかと知恵を働かせた熱心は「愚かなこと」ではない。どの人も豊作のために努力すべきであり、自分が得た財産を安全に管理するために知恵を働かせるべきであろう。このような自己決定をなすことは当然のこと

である。しかし彼は大切な一点に気づくことなく自己決定を自分の最善のこととしたそのことが、「愚かなこと」だとイエスは言われた。その大切な一点について、新約聖書のヤコブの手紙は次のように述べている。

よく聞きなさい。「今日か明日、これこれの町へ行って一年間滞在し、商売をして金もうけをしよう」と言う人たち、あなたがたは自分の命がどうなるのか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にしかすぎません。むしろ、あなたがたは、「神の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう」と言うべきです。ところが、実際は、誇り高ぶっています。そのような高ぶりは悪いことです。人がなすべき善を知りながら、それを行わないのは、その人にとって罪です。

―ヤコブの手紙四章一三節以下―

×　　×

人が、あの事、この事をなそうとして綿密に計画を立て完成のために努力すること、即ち自己決定することは、その人にとって当然のことである。しかし、この世の全ての事柄は人間の自己決定だけで成り立っているのではない。人がどのような決定決断をなして事を行う場合にも、人の決定以前に神の許しが先行しているのである。イエスはその命の事実を「神の支配」として提

示された。先に掲げたイエスの言葉にもう一度注目してみよう。

イエスは言われた。神の国(神の支配)はつぎのようなものである。人が土に種をまいて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのかその人は知らない。土はひとりでに(自然に)実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実が出来る。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。

―マルコによる福音書四章二六節以下―

人が自己決定する以前に「神の御心」「神の支配」「天の支配」「神の大決定」という命が躍動しているのである。種を蒔く者の努力以前に、また種を蒔く者の努力と同時に「土はひとりでに(自然に)実を結ばせる」という厳然たる事実がある。この事実こそ「創造に於ける自然」である。この厳然たる命のたぎりこそすべてに於いて第一の出来事なのであって、「誓う」という自己決定は第一の出来事を抜きにしては成り立ち得ないし、事実成り立ちようがないのである。

二羽の雀が二アサリオンで売られているではないか、だが、その一羽さえ、あなたがたの天の父(神)のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも、一本残らず数

えられている。

―マタイによる福音書一〇章二九節以下―

×　　×

万物は言うに及ばず人間が生きているということは、その形や姿、その知恵その認識や決定の如何に関係なく、それらは第二の出来事なのである。そこでは絶対に「然り」も「否」も成り立たないし成り立ちようがないのである。「然り」と「否」とは、第一の出来事としての神の御心に於て成り立っているのである。この神の決定の許(もと)で人間の自己決定は成り立つのである。「一羽の雀も、天の父(神)の許しがなければ地に落ちない。」だからこそイエスは、第二の出来事としての生を人間らしく生きるには「あなたがたは、ただ「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上のことは悪い者(悪魔)から出る」と言われたのである。

×　　×

「一切誓ってはならない」というイエスの提示は「神の然りと否」なる命のたぎりの自覚、創造に於ける自然の自覚によるものである、と同時に神の命のたぎりの自覚に生きなさい、というイエスの促しでもある。

イエスは「神の然りと否」の自覚体として生きられた。「イエスはキリストである」とはこの自覚体を言うのである。この場合の自覚体とは、何かを対象的に知っているという自覚ではなく、

それ自体を生きている、行じているという意味での自覚体ということである。したがって、イエスの言葉は「神の然りと否」としてのキリストの自覚体としての、その自覚が発語した言葉であるといえよう。その意味で、イエスの言葉は「宗教の言葉」であって、単なる日常に於ける指示の言葉や叙述の言葉ではない。

では、自覚体としてのイエスが語った「自覚」の世界、つまり「創造における自然」とはどのような構造の世界なのだろうか。

×　　×

「隣人を自分のように愛しなさい」と語ったイエスに、「隣人とはだれですか」とユダヤ教の聖書の専門家が尋ねた。

イエスは次のように答えた。ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリヤ人は、そばに来るとその人を見て哀れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してくださ

い。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。」さて、あなたはこの三人の中で、誰が追はぎに襲われた人の隣人になったと思うか。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って貴方も同じようにしなさい。」

―ルカによる福音書十章二五節以下―

イエスの言葉はいつも、自我の真底、つまり自我を自我たらしめている命のたぎりの世界から発語されている。この場合も同じである。したがって、イエスが提示している言葉を自我レベルで聞くなら、「困っている人には、親切の限りをつくして助けなさい」というヒューマニズムに立つ道徳的な教えとなる。勿論、そのような教えは大切なことである。しかし、イエスの言葉は自我を越えた深みからの発語であって、その出て来たところを覚づかないでイエスの言葉を聞くならその言葉が何を指し示しているのかが深く理解できない。

イエスの言葉を、その言葉づらで聞き、文字ずらを読み理解するだけでは、人間の常識的な自我の感覚で聞き読んだだけで、結局は、世間の常識的な道徳訓になってしまう。それではイエスの言葉を聞き、読んだことにはならない。だからイエスは「あなたがたは聞くには聞くが、聞かず。見るには見るが、見ず」と嘆息される。（マタイ一三章一四節）

× ×

イエスの言葉は、自我を越えたところ、自我の向こう側、自我を突き抜けた自我の真底、つまり自我よりも深い命の言葉である。それは命のたぎりが生ましめた言葉である。そこには本当の命の有り様が秘められている。そこには言葉にできない構造がある。それは「創造に於ける自然」であると言うしか仕方がない世界である。以下、おぼつかないが、その世界をイエスが語られた先の譬え話を手掛かりに探ってみようと思う。

×　　×

私たちは社会的な存在である。即ち、人間の共同体の一員として人との関わりの中で生きている者である。その関わり方は、「わたし」という者が「あなた」という者との関係に於いて生きているということで、決して「わたし」という者が独りで存在しているのではない。ところが、もう少し深く「わたし」なる者の存在をみると、「わたし」とは同時に「あなた」という存在であることに気づく。自分から他者を見るときのわたしは「わたし」なのだが、「あなた」から「わたし」がみられるとき「わたし」は「あなた」となる。と同時に、「わたし」と「あなた」という立場から「わたし」が見られるとき「わたし」は「かれ」となる。さらに、社会的な不特定多数となり、資本主義の論理で「わたし」が見られるとき、それは「ただのもの」となってしまう。とすると、「わたし」という存在は、社会の共同体の中での関係でみるなら、「わたし」であると同時に「あなた」であり、同時に「かれ」であり、さらには「ただのもの」なのだとい

うことになる。考えてみると社会的な存在である「わたし」は様々な側面をもった関係的存在として生きているのであって、決して、「わたし」とか、「あなた」とか「かれ」とか「ただのもの」とかいう個別のものが実体として存在しているのではない。

×　　×

ところが、「わたし」という者、「あなた」という者、そして「かれ」という者が存在し、その集まりが社会だと考えるならそれは大変な思い違いである。そもそも「わたし」という存在が独立した主体だと思い込んでいるのが「自我」である。つまり「わたし」は「わたし」によって「わたし」なのだと思い込み、その自我を自分の基盤または出発点とするのが所謂自我ということである。このような自我は必然的に「わたしはわたし」であって「あなたはあなた」だから「わたし」と「あなた」とは基本的に関係ありません、ということになる。これは典型的なエゴイストである。その結果「わたし」に利益をもたらすなら「あなた」と関わりましょう。しかし「わたし」に不利益をもたらす「あなた」とは関わりません。「あなた」がどのようになっても「わたし」には関係ありません、ということになる。その場合の「あなた」とは「わたし」に利益をもたらす「ただのもの」と化すのである。「わたしを利用するだけ利用して、それが出来なくなったなら、見向きもしなくなった。あいつは鬼だ！」などという不幸な叫び声が、世間のあちこちから聞こえて来る。その典型が資本主義社会に於ける経済の論理の中で人間が「ただの

物」として取り扱われてしまうことであろう。このような人間の「ただのもの化」は、経済の仕組みだけの内にとどまらず政治や軍事や宗教等の集団に於いても生じ、友人間や家族の関係に於いても起こる。「ただのもの化」とは「道具化」ということである。個人的エゴ、集団的エゴのために人間が消耗品、簡単に代替え可能な部品や道具として取り扱われるという人間疎外化である。そこではまともな対人関係、社会関係、即ち「わたし」も「あなた」も「かれ」も消失して「ただの物」となっている。まさに人間不在である。

×　　×

このような人間の在り方は、個人として、また対人関係として、さらに社会関係としての人間存在の正しい在り方ではないことは明らかで、そこには、本来の人間がいなくなっているといえよう。私はそれを「没個人」「没対人」「没社会」と言ってきたが、このような有り様こそ人間の不幸、人間社会の歪みである。いったい何がこのような不幸をもたらしたのであろうか。その答えを結論的に言えば「創造に於ける自然」の消失によると言える。イエスの提示は人間存在のこの一点の深みへの照明に他ならない。

×　　×

さて、先にイエスが提示した譬え話をイメージしながらもう一度読んでみよう。

場面はエリコ市への途上。四人が登場する。一人は追いはぎに襲われ半殺しにされ倒れている

ユダヤ人。そこを通りかかったユダヤ教の祭司。次にそこを通りかかった祭司の助けをするレビ人。今一人は同じようにそこを通りかかった男。彼は、ユダヤ教徒からみれば、正統的信仰から外れた嫌悪すべきサマリヤ人の一人。

結局、イエスは、倒れているユダヤ人に対し三人の関わり方を示して、人間の歪みと、人間の本来的な在り方を鋭く且つ深く、私たちに提示されたのである。

×　　×

二人のユダヤ教の祭司先生は倒れている同胞を見て、逃げてしまった。その様子をイエスは「その人を見ると、道の向こう側を通って行った」と言われた。一方サマリヤ人は、「そばに来るとその人を見て哀れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出して、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います』と言って仕事に出掛けた。ユダヤ教の祭司先生二人は逃げ去り、ユダヤ人から異端だ、嫌悪すべき者だと悪魔視されているサマリヤ人は親切の限りをつくした。

×　　×

サマリヤ人の行いには誰もが感動を覚える。立派な人だと共感する。そして祭司先生達には、なんという人だ、と怒りすら覚える。ましてや彼らが人々に神を説き、祭事に携わる者であるだ

けにその偽善性に腹立たしく思う。とすると、なぜサマリヤ人の行いに感動や共感を覚え、祭司達に反発を覚えるのだろうか。厳密には、私たちの内の何が、何について感動や共感や反発をするのだろうか。このことは事柄の善悪を決める前に、明確にしておかなければならないことである。

×　　×

サマリヤ人の行いは一口に言えば、非常に素直である。素直とは「そのまま」ということ、また「自然である」ということだが、では「何にそのまま」であり、彼の「何が自然」なのだろうか。これは理屈ではない。ここのところを明確にとらえておかないと、イエスが「隣人」について提示した事を正しく受けとめられないのではないかと思う。

×　　×

私たちが社会で安定した人間関係を保ちながら生きていくためには、共同体としての取り決めや一般的な常識的な通念がある。それに則して生きていけば善良な人間だと、共同体が認める。一般的な「よいひと」とはそのような人のことである。だが、そのような評価の主体は自我であり、自我レベルのことがらである。したがって、「よいひと」の評価はその共同体や時代によって変わって行く。だが、イエスがサマリヤ人に於いて提示した世界は自我の世界を越えた「創造に於ける自然」の世界なのである。

×　　×

「わたしは私であって私以外の何者でもない」と思い込んでいる当のものが自我である。しかし「わたし」とはそのようなものではない。「わたし」という実体など本当はどこにも無い。では「わたし」とは誰か。それは「あなた」や「かれ」や「もの」等のすべてを含んで現れ出てきた一つの形にすぎないものと言える。さらに言うなら地上に現れているものと、現れ出るべくして現れ出なかったすべてのものを含んで、現れ出てきた一つの形が「わたし」である。その意味では、「わたし」は同時に「あなた」であり、「かれ」であり「もの」なのである。だが、「わたし」という主体が実体としてあると思い込んでいる自我の立場から見る者には「わたし」が同時に「あなた」また「かれ」「もの」であるという言説は、到底理解できない狂気の沙汰となる。これは当然の事である。なぜなら自我はいつでも、どこでも「わたしは私であって、あなたでも、かれでも、それでもない」と思い込んでいるからである。自我はそれ自体で自己充足しているので、自我を自我たらしめている自我を越えた本当の命の主体の働きを認めない。自我は何時も自分の究極の主人だと思い込んでいる。だが、そのような自我の世界をひょいと越えたその場から「わたし」を見るなら、当の「わたし」が同時に「あなた」であり「かれ」であり「もの」であるという自我の本当の姿が見えてくる。

イエスの言葉は自我を越えて自我を自我たらしめている本当の命の主体から発語されている。

このような言葉を「宗教の言葉」と言うなら、宗教の言葉に於いてこそ本当の人間の自我の素直な姿が言い表されているのだと言える。だからこそ素直な人は宗教の言葉に共感する。次のようなイエスの言葉はその代表的な一つである。

あなたがたも聞いているとおり、「目には目を、歯には歯を」と命じられている。しかし、わたしは言っておく、悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬を向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着を取らせなさい。だれかが一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。

あなたがたも聞いているとおり、「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父(神)の子となるためである。父(神)は悪人にも善人に太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか。……。

―マタイによる福音書五章三八節以下―

イエスにとって「わたし」も「あなた」もない。あなたがわたしであり、かれでありそれなのである。悪人も善人もない、敵も味方もない。敵を赦すとは自我の世界のことであり、自我を越えたその場には赦すべき敵などない。そのような現場から発語されているのが「宗教の言葉」である。

イエスは宗教の言葉を語っただけでなく、その存在全身を宗教の言葉と化して言動なされた。だから当時の素朴で素直な民衆は、聖書の律法を詳細に解釈し、それを人々の宗教や日常生活に適用することで国民を支配しようとした律法学者や、神殿祭儀を形式的に重んずる宗教人よりも、イエスの言葉と行いに宗教的な慰めと生きる力を得たのである。マタイ福音書は次のように語る。

群衆はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者(自我から開放された自由人)として教えられたからである。

―マタイによる福音書七章二八以下―

イエスは「わたし」も「あなた」も「かれ」も「もの」も同時である生を行じられ、このような人間の存在の根本構造を「愛」と表現された。次の言葉もその一つである。

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

—ヨハネによる福音書一五章一二節以下—

だからヨハネは、わたしとあなたとかれとそれとを越えた愛の現場には神の命が現成していると言った。

わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

—ヨハネの手紙一四章一二節以下—

×　　×

イエスの言葉を「命令言語」として理解するなら、それは典型的な自我からの理解である。自我はいつも「わたし」にだけ配慮し、「わたし」の自己実現を願っている。「わたしが正しく生きられるように」「わたしが神に救われるように」「わたしが…わたしが…」と言う。そのような生き方は一見誠実な生き方、信仰深い生き方のように見えるが、それは自己主張としてのエゴ

イズムの典型である。そのような一見誠実そうなエゴイストは、イエスの言葉を倫理または律法と理解する。その行き着くところは「わたしは善い行いが出来ない罪人です。そのようなわたしをイエスは愛をもって救ってくださいます。ありがたや、ありがたや」と涙を流すことで一件落着となし、自己満足することになる。勿論、それ自体はその人にとって安心となるに違いないし、それなりの生きる力の効用となろう。しかしイエスの語りの本質はそこにはなく、「わたし」に固執してそこから一歩も出ない自我からの超脱と解放とによって自我の真底に覚づくことを促されたのである。その意味でイエスの十字架の死を贖罪とする理解は、そのための最大の方便だったのではないか。(これについては後でご一緒に考えてみたいと思っている)

×　　×

イエスは「友のために自分の命を捨てることが愛だ」と愛の定義をなし、その愛の実戦を命じておられるのではない。自我を越えたそこでは「わたし」とか「あなた」とか「かれ」とか「もの」とかが主体や実体としてでなく、それらすべてを含んだものとしての「本当のわたし」が、存在の根底に構造としてあることをイエスは提示されたのである。にもかかわらず、イエスの言葉を聞く者はいつも「わたし」がこちら側にいて「あなた」や「かれ」や「もの」が向こう側にいる、という関係の構図で見て、「わたし」がそれらにどのように関わればよいのかということばかりに関心をそそぐ。その結果イエスの言葉や聖書の言葉を、関係を教える指示や命令の言葉

として受けとる。そしてその言葉に従順に生きることを「正しいわたしの生き方」「聖書的な信仰人の生き方」だと思い込む。その結果、事あるごとに「聖書、聖書」と聖書の言葉を振り回して安心する。このような在り方こそ典型的な自我による在り方だと言えよう。事実、そのような人達のなかにはときとして、見えない独善の影を感じるのはわたしだけの偏見なのだろうか。

×　　×

自我を越えるとは「わたし」を越えると言うことである。「わたし」を越えるとは、「わたしを捨てる」ということである「わたしを捨てる」とは「本当のわたし」に覚づくことである。そして「本当のわたしに覚づく」とは、「存在の構造に覚づくことであり、それは「創造に於ける自然の現場に覚づく」ことである。そして「創造における自然の現場に覚づく」とは「神の支配の構造の現場に覚づく」ことである。それが「神の愛」に目覚めるということであろう。そして、その現場を生み出しているのが「命のたぎり」に他ならない。このように自我の世界を越えたところが自我の真底であり、自我の真底に人が覚づくとき人間としての真の安らぎを知るのである。その現場の構造の具体的なイエスの言い表しが先に述べた「親切なサマリヤ人の譬え話」である。

×　　×

したがってイエスが語った「親切なサマリヤ人の譬え話」は命令や指示や、道徳的な規範の提示ではないことを再度確認しておこう。

譬え話に於けるサマリヤ人は、「倒れている人を見て憐れに思った」（ルカによる福音書十章三三節）。この場合の憐れに思うとは、深い深い同情心のことである。その思いのところでは「わたし」と「あなた」という枠が消えて「あなた」が「わたし」に、「わたし」が「あなた」になっている。もう少し厳密に言えば、「あなた」が「わたし」に抱え込まれているのではなく、「わたし」が「あなた」に抱え込まれているのでもない同情である。

「あなた」を「わたし」の思いで抱え込めば、それは「わたし」の自我で相手を抱え込む自律となる。また「あなた」の思いに「わたし」が抱え込まれれば、それは「わたし」が「あなた」により抱え込まれてしまう他律となる。サマリヤ人が抱いた憐れみは自律でも他律でもなく、自我の深みを越えた人格の本当の主体である神の支配、つまり創造に於ける自然としての命の促しへの従順だったのである。倒れているユダヤ人を見て「憐れに思い近寄って」というサマリヤ人のその現場では、「わたし」も「あなた」も「かれ」も「それ」も自我を越えて自我を自我たらしめている根源的な命に於いて一つにされている。その命を行ずることが愛を行ずるということである。したがって「愛を行ずる」とは「わたしがあなたを愛する」ということではなく、わたしとあなたが一つである創造に於ける自然の命の事実としての愛に自我が促されて生きることが「愛を行ずる」ということである。

× ×

「本当のわたしとはどういう者なのか」ということは、どの人もひそかに問うていることである。「ひそかに」とは、その人が自覚しているか否かに関わりなく、だれもが心の内にもっている「問い」であり「求め」であるという意味である。つまり、誰もが自分でも気づかずに「自分探し」をしており、人は結局「本当の自分に出会うまで安心できない者」であるということ。その意味で、人生は自分探しの旅であると言えよう。

×　　×

いつも言うとおり、私たちは、まず自分があり、それとは別に他人がおり、また他の物があって、しかるのちにそれらとさまざまな関わりをもっているのだと思い込んでいる。しかし、そのような在り方の理解は「自分の思い込み」が作りだした世界であって、本当のところでは、そのような在り方の関係は無いのである。なぜならすでに述べてきたとおり「わたし」とは同時に「あなた」であり「かれ」であり「それ」なのである。その意味で「わたし」に対して「あなた」や「かれ」や「それ」を対象化して立てることは、一種の人間が作り出した「幻想」である。そのような観念が作り出した幻想を事実だと思い込んだそこから、いっさいの人間関係の歪みが生じてくる。例えば「わたし」の利害関係で「あなた」を規定してしまうということ。つまり「わたし」にとって快や喜びや益になる「あなた」とは積極的に交わり、不利益や不快をもたらす「あなた」は積極的に排除するか、又は「わたし」にとって利益になる「あなた」の部分だけ

を取りこんで程々に付き合うというようなことになる。このように「わたし」に対して「あなた」を規定した哀しくも悪しき人間関係の様子は根本的に歪んでいるといえる。その歪みの現れ出た一つが、先にイエスが述べられた「親切なサマリヤ人」（ルカによる福音書十章二五節以下）の話なのである。

×　　×

レビ人や祭司達が宗教の指導者だったというだけでなく、彼らがそうでなかったとしても、瀕死の状態で助けを求めている同胞を見て逃げてしまったその態度に、人間としての歪みをだれもが感じるのではないだろうか。そして一方、宗教的に敵であるユダヤ人を助け、親切の限りをつくしたサマリヤ人には、人間らしさを感じ、安心と感動とを覚える。そのような感情は「わたし」のどこから生じてくるのだろうか。

問題は両者の「あなた」に対する見方が全く異なっているところにある。祭司達は倒れているユダヤ人を対象化した「あなた」と見る。つまり「わたし」という者をしっかりと立てて、そこから「あなた」を眺めるのである。眺めるとは「わたし」の思いで相手を色付けし限定し思い込むということである。そこでは、「あなた」が本当はどのような存在であるのか、ということに全く気づかないままで、「わたし」の一方的な思いで「あなた」を処理してしまっているのだ。その意味で倒れて助けを求める者の叫び声は、祭司達には聞こえない。そこに倒れているのは祭

司達が思い込んだ「あなた」だけである。だからこそ、祭司達は自分が行ったことの歪みは見えてこない。それどころか、現場から立ち去った自分の行動は正当であるという理由を胸をはって言いつのることが出来るのである。しかし、その正当性は自分の観念で作り上げた自分だけに通用する独善であり、虚構であり、ただの幻想にすぎないことである。

一方、親切なサマリヤ人は、助けを求めるユダヤ人を対象化した「あなた」とはしなかった。厳密には彼は、「あなた」として対象化する以前に思わず救いの手を差し出していた。そこでは「わたし」が思う「あなた」はいない。つまり、「わたし」と「あなた」という関係以前の「わたし」と「あなた」がいるだけである。ということは、「わたし」と「あなた」との分別はそこにはない。あるのは「わたし」という「あなた」、「あなた」という「わたし」だけである。端的に言えば「あなた」も「わたし」もいない。いるのは「本当のわたし」だけと言える。つまり、倒れて助けを求めている者に親切の手を差し出したときの彼には、倒れている者の宗教や身分が何か、その者と自分とはどのような関係にあるのか、敵か味方か、利益が得られることか否かというような分別はない。「分別はない」とは分別以前という意味である。この場合の「分別以前」とは理性的な反省以前ということである。そして「理性的な反省以前」とは未だそれが言葉化されていない以前ということにほかならない。すなわち、自我の目が見もせず、自我の耳が聞きもせず、自我の心に思い浮かびもしなかった自我の真底、神の支配の現場、存在の根底として

の命のたぎりの直接的な促しへの従順としての行いだったのである。

「命のたぎりの直接的な促しへの従順」とは「創造に於ける自然への従順」ということである。自我がそれへの従順に生きることが「愛を行ずる」ということである。結局、「親切なサマリヤ人」は真実の意味に於いて「愛を行じた」のである。そして祭司達は「わたし」という歪んだ自我だけを行じたのあった。

×　　×

それにしても、「わたし」なるものの何たるかを再度確認しておきたい。つまり「わたし」とは「あなた」や「かれ」や「それ等のすべてを含んで現成してきた形にすぎないものである。それが本当の自我の構造である。にもかかわらず「あなた」や「かれ」や「それ」に対して「わたし」だけを主張するなら、それは「歪んだ自我」となる。「歪む」とは「創造に於ける自然」から逸脱している在り方という意味である。

では、なぜ「わたし」の本当の構造がそのような事になっているのだろうか。それは「神の大決定」と言うほかない。そのようにあることで、それがそれでありうるように有らしめられている、としか言いようがない。ここのところの構造に少し立ち入ってみると次のような事があきらかになってくる。

「わたし」なる者は、自我という形と在り方で世に現成してくる以前に於いては「命のたぎ

り」としての動的な無形である。それを旧約聖書は「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面(おもて)にあり水の面を動いていた」と言い表している。(旧約聖書　創世記一章一節以下)これは一般に「無からの創造」といわれている。この場合の「無」とはその道の研究者によっていろいろと解釈されているようだが、「無」とは「有無」の無ではないだろう。有無を超えて有無が極まるところに躍動する命(命のたぎり)こそ「無」なのである。その無から創造されたその命のたぎりの姿こそが、創造に於ける自然である。その意味で「神」とは、創造者とか創造の根底であるというより、有無を超えて有無が極まるところで躍動する命のたぎりその事だと言える。その事としての神は言わば「御こころ」(セレマ)だとも言える。その御こころ(セレマ)が「こころしたとき」天地が現成した、と創世記は述べている。

初めに、神は天地を創造された。
神は言われた。
「光あれ」
こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。

—創世記一章一節以下—

×　　×

神の御こころがこの地上に現成したとき、例えば「わたし」という自我として現成したとき、「わたし」「あなた」「かれ」「それ」と形づけられた。このような人間の存在の形は創世記に於ける人間創造の物語で知る事が出来る。

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れた。人はこうして生きる者となった。

主なる神は言われた。

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来た。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つける事が出来なかった。

主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を作り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。

「ついに、これこそ

わたしの骨の骨

わたしの肉の肉
これこそ、女(イシャー)と呼ぼう
まさに、男(イシュ)から取られたものだから。」
こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。
人と妻とは二人とも裸であったが、はずかしがりはしなかった。

× ×

創世記に於ける人間創造の物語は、男と女との関係の在り方を語るだけではなく、人と人との本来の関係の秘儀とも言うべきことを提示している。つまり「わたし」と「あなた」とは対象的な他者であるままで、「わたし」という自我の思いに抱え込まれて利用される対象ではなく、「わたし」という人、「あなた」という人が互いに人であり、人となるために、対等なる関係存在であるということである。その関係の事実の表現が創造の物語に於いては「人から抜き取ったあばら骨で女を作った」と記されている。これは「わたし」と「あなた」との元関係(げんかんけい)の言い表しである。本来的に「わたし」は「あなた」なのである。その元関係性を「愛」というのである。したがって、「わたし」がいて「あなた」という人間が存在し、互いに助け合わねばならないから相手を愛さねばならない、という単なる知的な反省の作業や知識(たんなるヒューマニズム)で論じる事ではないのだ。人間は本来関係の中で作られ在らしめられることに於いてこそ、具体的

な自分でありうるのである。その人間の本来の命の姿を直接経験し、その命の事実に開眼する事をキリストに目覚めると言うのである。

×　　×

神はどのような姿形(すがたかたち)をしておいでになるのだろうか。人はいろいろと想いめぐらし、その像(かたち)をイメージして造る。多くの人々がそれぞれの自然的、精神的風土の中で、数多くの神の像を、木や石などを素材にして作りあげて来た。そして、それらの像を祭り上げ、礼拝の対象としてきたし、今も伝統的な装いをこらして存在している。

×　　×

それらの神の像(かたち)が文化人類学的、また民俗学的、宗教学的研究対象と見られたり、ある人達には祭りの対象として大切にされている場合はともかく、厳密に「神」について考える場合、神なるものを日常的な経験の世界で花や木、犬や猫、等を客観的対象として見るそのような存在と同じように見てはならないし、見なしてはいけないと思う。私が自動車を見るように「神を私が見る」という主観――客観の構図の関係に、神と自分とを関係づけてはいけないと思う。それは、神を対象化するということである。

この地上に、最強最大の存在としての「神」なる者が存在している、という意識と感情をもつことは、実は人間の無意識やその願望が生み出した幻想にすぎないといえる。さらに、「天にお

いでになる見えない神さま」と祈り、唱える場合に於いて、人間世界を遠く離れた所に、聖(きよ)い神さまがおいでになる、と人が思うのも、それは自分の想いが生み出した一種の像なのである。「白く長い髭をはやし、真っ白い衣を身にまとうた上品なおじいさまがおいでになる」というイメージにつらなっている。芸術の世界で作家がいろいろとイメージしたそれを造形するのは、それなりの美的表現として意味があるのだろうが、先程も言ったとおり、厳密に神を考え、また人間との関係を問いただす立場からは、神をそのように見てはならないと思う。

×　　×

旧約聖書に、神が人に与えたという「十戒」が記されてある。その第二戒には次のように記してある。

あなたはいかなる像も造ってはならない。
上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形に造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それに仕えたりしてはならない。

―出エジプト記二十章四節以下―

×　　×

これは一般に「偶像禁止」の戒めとして理解されている。たしかに、神をどの様な姿形にも造

形してはならないという戒めは、その通りだと思う。つまり姿形を造らないということは、神をいかなる意味においても限定しないということである。

形とはそれ自体限定されたものでる。皿は皿の形に於いてそれ自体を皿として限定しており、だからこそ私たちは皿を見て「これは皿である」と言えるのである。ということは、皿として限定されている皿は、暗黙のうちに、「おれは茶碗ではない、花瓶でもない」と自己主張しているのだとも言える。つまり、形は自己限定する事であり、同時に自己主張することでもある。さらに私たち自身においても同じである。松下は松下の姿形をして存在している。だからこそ、松下を見て「あの人は松下だ」と確認してくださる。と同時に松下は、松下としての姿形において暗黙のうちに「松下は他の誰でもないのだ」と自己主張しているのである。形とはこのように、好むと否とに関わらず、そのような有り様をしているのである。

×　　×

それにしても、神についてどのような偶像も造ってはならないというが、そのように戒める神を、人はどのように捉え理解しているのであろうか。もし、神を何らかの「存在」として捉え理解しているなら、「存在という形」をもっていることになる。なぜなら、「存在」とは「一種の形」であるからだ。このことについては古来いろいろと、多くの人達によって論議されてきたが、私たちの関心は聖書が語り、イエスが捉えていた「神」とは何かということである。これについ